

## 「閏」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

ごきぶり打つ親の敵と思ふまで 長井 敦子

兜虫は歓迎され油虫は敵視される。これほどの差別はないのではないか。でも油虫と出くわしたら、人間は驚くと同時にこれを必ず打つ。遺伝子の所業かも知れぬ。六十年も前のテレビ劇『変幻三日月丸』の「怨みは深し父母の涙を晴らすとき来たる」という七五調の主題歌を思い出した。物静かな作者の眼が光る。

西日濃しミシンの影の名画めく 中代 曜子

大西日が部屋に射し込み、置かれているミシンに影を作った。どの角度から見たのか、ミシンの曳く影が芸術的に思えて「名画めく」という表現になったと思われる。ミシンは電動でなく、昔ながらの足踏みミシン、それもシンガー社製の物かもしれない。名画は例えばキリコの遠近的手法の絵。ミステリアスな構図を持つ句である。

鼻つまみみんな真似る子今も居て 中嶋きよし

小さい頃の作者もきつと同じように鳴いたのだろうか。これも古き世からの遺伝か。昔の軍隊で殴る蹴るの後に

初年兵を柱に抱きつかせ、みんな唸らせたという陰惨な話は論外だが、子どもが自然体で蟬の真似をするのは華があり明るくていい。作者の童心が羨ましい。

日記書くわが空蟬を残すがに 中村 敬子

自身がすでに空蟬状態であるという。日記を書くには常に覚醒した自分が居なければならぬが、作者は空蟬となつて毎日どのようなことをどのように書いているのだろうか。辛い句であるが、確り自分と向き合っている。

ビッグバン由来と思へ汗つかき 中村 東子

汗に「ビッグバン」を取り合わせた大きな句。138億年前に今の宇宙を作ったビッグバンが起きなかつたら46億年前に地球も地球の生物も生まれなかつた。中村さんも誕生してなかつた。だから自身のかく汗はビッグバン由来なのである。爆発したエネルギーの熱さから汗つかきになった。宇宙人は汗つかきなのだ。

糸瓜みゆ子規の机のそのままに 中村 幹子

根岸の子規庵。子規の左足は曲つて伸びなくなつたので、子規の座机は左側が四角く割り抜かれ立膝でも入れるようになっていた。糸瓜棚は亡くなる前年の夏に作られた。臥して子規のように糸瓜を仰ぐ作者。

蟬頃となりしか殻はてんでんに 野沢 慶子

蟬が飛ぶ季節を「蟬頃」と言ったのが独自。蟬が鳴いてそう思ったのではない。葉にぶら下がったり、吹かれて転がっていたり、あちこちに見掛ける蟬の殻。それが作者の思う蟬頃。「てんでんに」もそうだが、借り物の言葉でなく自分の言葉で詠んでいるのが好ましい。

間口二間匂ひ十間鰻茶屋 橋本 恭子

間口二間で鰻を商う店。でも中に入ったらどうだろう、鰻を焼く匂いが店内に所狭しと漂う。この句、間口二間に対し「匂ひ十間」がとても巧みで、それだけで鰻重、鰻丼の美味しさが充分に伝わってくる。

リヤカーの噓せる夏桑父戻る 長谷川菊男

養蚕を営み、山で桑の葉を摘む。びくに入れて帰るのであるがこの句ではそれをリヤカーに乗せて運んでいる。リヤカーを引いて戻ってきた父とそれをいつものように迎える家族。リヤカーから夏桑の噓せるような匂いがする。勿論、父の体からも。「父戻る」に敬いの心がある。

帰るさの荷物重たき西瓜です 畑野 竹代

重いといつて西瓜を持つのが嫌なのではない。むしろ楽しく感じている。「西瓜かな」でなく「西瓜です」が

そのような心持ちをよく表している。瑞々しい。

虫嫌ひを返上させし兜虫 浜田 優子

虫全般が苦手なのだろう。獣類、鳥類、魚介類以外の小動物、昆虫をいうが、確かに便所コオロギが跳ねたり百足虫が靴のそばに来たりしたら悲鳴を上げてもおかしくはない。その作者が或る日、兜虫を見てそれまでの虫嫌いを返上したというから、きつと何かの出会いがあったに違いない。

優曇華や蛻の殻の蚕棚 原田ミチ子

今まで養っていたお蚕さんの世話が終った。もぬけのからの籠は何層も積み重ねられ、蚕棚に納まる。その天井辺りに草蛉の卵である優曇華が生みつけられていたのだろう。都会の机上では作れない実景の作。

自転車の爺が爺抜く梅雨晴れ間 平野 豊雄

芭蕉の時代に自転車が存在していたら、芭蕉が曾良の自転車を追い抜くこともあつたらう。それは兎も角、この句の初めの爺は自転車に乗っていて後の爺は歩いていと読むか、両者共に自転車に乗っていると読むかだが私は後者派。雨上りの明るい道を急ぐ精悍な爺と、抜かれてもマイペースな爺。両者の存在が抜群に爽やか。

検温の額にピストル日雷 平野 美子

体温計での検温でなく、皮膚赤外線検温計による検温。もうお馴染みである。非接触型であるが額の前にそれを差し出されると何かピストルを突き付けられている心地もして、出来ることなら御免蒙りたい。作者の場合は、日雷を感じたようだ。ピストルから発射されたのだろう。

ここかしこ黴のこゑあり賑はしや 福井 芳野

黴の家を訪ねたときに留守で、帰ろうと振り返つたらその家の主が立っていたという怖い経験をしたことがある。そんな家中が黴だらけの家でもないだろうが、掲出の句はたくさんの黴に声がして賑やかだと詠む。黴なんて嫌だわと詠まないところに俳諧がある。

アロハシャツ無頼の日など遠きこと 舟生 信子

今は紳士淑女の皆さんだが、より活動的だった若き時代にはこの句の作者のように無頼を決め込んだ振舞いをした方もいただろう。半世紀前にはアロハシャツを着た人間なんぞ真つ当な人間として扱われなかった。その時代を顧み「遠きこと」と詠むが、無頼の血は消えまい。

打水を引きずつていく轍かな 本多 遊子

打水の句ではかなりユニーク。山口誓子の「夏草に汽

罐車の車輪来て止る」の如き冷徹な写実の眼をこの句にも感ずる。打水を曳いていく車の輪の跡が光つてとても印象的である反面、打つたばかりの水を車が轆くという行為には多少の残虐さが残る。その両面に作者は美を感じたと言つてもよさそうだ。

ポンポンダリアワクチン接種の列進む 水谷 光子

コロナワクチン接種を待つ憂鬱な一日。並んでいる人々に笑顔はない。このままでは暗い句に終つてしまう恐れがあるが、作者はそこへ赤や黄など色彩豊かなポンピングを取り合わせてみた。ポンポンの響きが心地よく、ワクチン会場も明るくなったような気がする。接種後の安堵した顔も見える。ポンポンで成功。

この頃はシエスタの日々旅心 持田きよえ

シエスタは昼食後にとる昼寝という。昼寝と言えはいいものをシエスタと洒落こんだのはスペイン辺りに旅行したことがあるからだろう。三十五℃を超える暑い日が続いた今夏を考えれば、昼寝はコロナ疲れや体力の回復によろしいと思う。眠くなつたら眠ろう。

水舟の底に日の射す西瓜かな 森尻 禮子

水舟は飲料水などをたたえて置く大きな桶。古い宿場

町では長く太い丸太を削り貫いて作られたものもあり、この句のように西瓜を冷やしてもいた。水舟の水の底までじりじりと日が射し、時が流れて行く。西瓜がくつきり鮮やかな縞模様を浮かべ、時を待っている。

武蔵野の大地を焦がす炎暑かな 八尋 信子

武蔵野は昔から、草の野がつぎ美しい月がどこまでも見える土地というイメージが強い。ただし夏になればこの句のように「大地を焦がす」野と化す。今年の夏は連日「炎暑かな」だった。ご自愛を。

初蟬や 檜の巨木 仁王立ち 山下 道子

檜の巨木。空高く聳え、それは仁王立ちしているようだ。作者は詠む。初蟬はもちろんこの巨木で鳴いていて、もう蟬の季節になったのかと作者を驚かす。樹ならたくさん立っているだろうにこの蟬は檜を産土として選んだ。初蟬ながら、仁王立ちの巨木を得て堂々と鳴く。

薬王院に着くや 牡丹の香りくる 山田 雅子

高尾山の薬王院か。様々な牡丹が咲き参詣者を迎える。この句、「着くや」がいい。着くやいなやという意味であるが、この措辞により牡丹の美花の香が直截的に伝わってくる。品格のある句である。

かたつむり沓脱を落ちさうにゐる 夢 十夜

蝸牛を家の平らな沓脱ぎ石に見たか。蝸牛はびつたり身を密着させながら這うが、この句の蝸牛は沓脱の断崖絶壁をなにか危なさそうに進んでいる。「落ちさうにゐる」が作者独特の捉え方で面白い。

嬰が手を入れ搔きまはす 金魚鉢 旭 光

驚いたことだろう、金魚も周りの人間も。嬰は勿論、それが金魚鉢であるとは知らず、搔き回したものが水であることも知らない。金魚を見て衝動的に鉢に手をいれた。周りにはらはら。嬰はドヤ顔。臨場感溢れる一句。

仲麻呂と李白を偲ぶ けふの月 東 祥子

名月を前に阿倍仲麻呂と李白を偲ぶ作者。「三笠の山に出でし月かも」と詠んだ安倍仲麻呂。酔って水中の月を捕えようとし溺死した詩人の李白。二人とも八世紀初めを一生懸命に生きた。その二人を偲ぶ「けふの月」の美しいことよ。今年の仲秋の名月は、八年ぶりに満月。

故郷の渡れぬ橋や 草いきれ 荒尾寿美江

故郷に帰ると、幼い頃には渡れた橋がもはや崩れ始めて、あまりにも危険なので閉ざされているという光景を目にすることがある。立派な新しい橋が架かりその近く

に古い橋が残骸として残ることも。永い歳月が経ってしまつた。この句の「草いきれ」のやるせなさ。

海鳴りに別れのことば聞けず夏 飯野 幸子

これから荒れてくるのだろうか、沖の方から海鳴りがある。人には誰でも出会いと別れがあり、季節にも始まりと終りがある。ひと夏が終るこの時期に、出会いも又終りを迎え沈黙の時が流れる。海鳴りにかき消される言葉。唇の動きに別れの刻を知る。

冷房に冷えて地球を温むる 伊澤やすゑ

人間の日々の営為が地球環境を破壊しつつあることを皮肉つているような作品。冷房の室外機から熱風が吐き出され街全体を熱している。テレビでは熱中症を避けるための「適度な冷房」を呼び掛ける。気温の上昇による線状降水帯の出現、川の氾濫。暮しと文化の向上を貪欲に追求してきた人類への自然界のしつぺ返し? 「温むる」の優しい措辞が、ぐさつと胸に突き刺さる。

カエル愛する拳闘の姫夏終はる 石井 佐知

東京五輪のボクシング女子フェザー級で優勝した入江選手の健闘を讃えた一句。「練習した分だけパンチは当たる」を信条とし、試合後に「今日だけはトノサマガエ

ルになれた」と語つたこの20歳。笑顔もよかつた。

黒南風に藻屑流るるほの明り 石垣喜代子

黒南風の吹くが儘に暗む空と海。その波の上を藻屑が流れていくのが見えた。微かな光がその藻屑を覆つていたからだ。作者にとつては何かの光明に見えたのだから。「ほの明り」は明日に繋がるささやかな希望の光。

てのひらの落蟬脚をたたみけり 市村 啓子

臆病者の私は蟬を掴めない。しかし作者は平氣の平左で蟬を乗せている。しかもよく生態を観察している。「脚をたたみ」に短い命の哀しさが表出されている。

おとなひとかち合ふ西瓜切るところ 岩根 甲

西瓜を切ろうと構えているところに訪問者が現れたのだろう。その訪問者は包丁にびつくり。「見たな!」と振り返る作者。もちろん仲良く西瓜を食べたことだろう。

夏座敷特攻隊の最期間く 牛込はる子

夏座敷で一緒に居た方から特攻隊の最期の様子を聞いた作者。昭和十九年、劣勢続く日本軍はインパール作戦を強行して完敗。夏にはサイパン島奪還に敗北し玉碎。そこで十月に軍令部が特攻作戦を起案し神風特攻隊が全

国に編成された。レイテ沖海戦で連合艦隊はほぼ全滅。特攻隊の体当たり攻撃がそれから主体となった。九度出撃して九度生還した「万葉隊」の特攻兵も居たが、殆どが帰らぬ人となった。まことに切ない話である。

灼ける砂に足裏火傷す初デート 内海 範子

初めてのデートが海水浴。裸足で灼熱の砂浜に降り立つと、数歩進むだけで足の裏がひいひい痛む。「火傷」とは大変なことになったが、それがご縁でその後もデートを重ねられたのではと俗人は邪推する。目度いい一句。

蝸の音調巧み黄泉を呼ぶ 大下 壽櫻

哀調を帯びた蝸の声。何度聞いても胸を締め付けられる思いがする。作者もまた雨上りの夕刻、蝸に聴き入ったのだろう、それが「黄泉を呼ぶ」ように聞こえたという。「音調」は音の高低、アクセント。巧みの極みだ。

地の力と四つに組んで草むしる 太田 裕子

草の根の強さ。そしてそれを支える「地の力」の強さ。草を挟んで、この炎暑に作者は一生懸命に地の力と四つ相撲を組んでいる。謂わば大地と格闘しているのである。非力な私だったら絶対に草は抜けてくれないが、この句では「草むしる」と結んでいる。作者の力が優った。

五月雨や物流トラック途切れなく 小河原政子

途切れなく降る五月雨。途切れなく進む物流トラック。五月雨は縦に降り、トラックは横に進む。その交わりが映像的に斬新。俳句は先ず発見が大切。次に何を感じるか。その次に詩としてどう表現するか。

軽トラックの鉄屑の荷に凌霄花 金子かほる

この句も荷台に積んである鉄屑という素材に目を付けて、じっくり見た挙句に凌霄花を発見した。それが手柄である。詩とは無縁と思われるような鉄屑に艶っぽい凌霄花が寄り添っている。そこに詩がある。

大國魂の茅の輪潜りて馬券買ふ 金子 学

府中市の大國魂神社。作者は茅の輪を潜り、身を祓い清めて無病息災を祈る。願わくば、清めた心と体で近くの東京競馬場に行き馬券を当てんと。「馬券買ふ」への転調が見事。

先生はユーチューブなり蛸捌く 金田 知子

この句は何と言っても「蛸捌く」が秀抜。吸盤を持つあの大きな蛸と苦闘する作者の様子が想像できるからである。ユーチューブの蛸と相對する組板の蛸。ユーチューブの動きとは異なる勝手な動きをする蛸もあるだろう。

思わぬ苦笑、引き攣る顔が目に見えるようである。

虫干しの部屋中着物かくれんぼ 金田 喜子

陰干しするので、部屋中に着物を広げたり掛けたり。そこが子どもたちの格好の遊び場にもなり、かくれんぼもしただろう。着物の色々の紋様、様々な彩。そこに集まる子らの嬉々たる顔。作者もその一人だったか。

蹠跟たり蟬の不意打ち頬に受け 菊地 孝枝

蟬の季節も終り頃になると蟬が思わぬ方角から飛び込んでくる。作者は頬に直撃を受けよろめいてしまった。「蹠跟たり」の言葉の強さ。でも蟬も必死なのです。

バンクシーの落書きである雲の峰 栗原 季星

バンクシーは世界各地に出没する路上芸術家で、先日オリンピック会場近くでそれらしき作品が展示されたとの報道があった。この雲の峰をバンクシーはどうやって描いたのだろう。いや未だ描いているようだ。みるみる大きくなつていく。

炎天と競ふがごとく百日紅 小唄あゆみ

灼けつくような暑い空と闘うことは到底無理だが、競うだけであれば私は沖繩のかりゆしを着て歩く。この句

の作者はそれを百日紅に競わせている。深い紅色が群れて重なり、あまりにも濃い花の一部は空に滲み出ているようにも見える。花期が長いので炎天と競うほどの日もあるかも知れない。面白い捉え方の句だ。

額あぢさぬ夫エンディングノート買ふ 小泉まり子

保険証の番号、かかりつけの医療機関、既往症、延命治療を望むか尊厳死か。総資産リストと額、借金、葬儀の希望、その規模、葬儀に呼ぶ人のリスト、遺影の有無、遺言、遺産分割の希望、家族や大切な人へのメッセージ、自分史年表など。いざ書くとなったら大変である。作者は額紫陽花を句にあしらひ、夫の健勝を祈る。

蟬の土地ぼこぼこ穴ここかしこ 小濱けえ子

蟬の穴がたくさん弾痕のように開いている。その穴を「ぼこぼこ」「ここかしこ」と形容する語感が素晴らしい。それに「蟬の土地」という言い方も、そうだな元々は蟬の土地なんだよなと、妙に納得してしまう。

男なら泣くなは無体サングラス 小林ゆきお

「男ならやってみな」「女々しく泣くな」などなど昔からの封建差別は男にも及ぶ。それは女性差別と表裏一体。さすがに作者もそれは「ご無体な」と訴える。この

サンングラスは涙を隠すために掛けているのだ。

ものの怪や憂くたれし栗の花 小林 玲

蜜の出る頃に栗の花を見掛ける。この句では夜八時頃、匂いに先ず気付き、よく目を凝らして見ると栗の花だったというくらいの薄暗い畑。「もののけ」「ものうく」の感じ方に納得し、また「もの」で韻を踏む技巧に唸った。

菖蒲園鉄橋ばかり見上ぐる子 斉藤久美子

折角菖蒲園に連れてきたのに花はろくすつば見ないで鉄橋の電車ばかり見ている子。まあ、まともな子です。菖蒲の俳句を作っていたとしたらそちらの方が心配。堀切菖蒲園か。

峰雲や棧橋に待つ島訛 佐藤 和子

旅人を受けて離島へ渡る船。近づくにつれ峰雲が大きくなってゆく。下船して棧橋に待っていたのはもちろん地元の人で、その訛に温もりが感じられた。島訛が待っていたという把握は、作者が新鮮な旅をしてきた証。

諸焼耐人生観を熱弁す 島 昌子

酒飲みの癖。この句の主人公は酔うとつい本音が出、極私的な人生観、価値観を大きな声で熱弁してしまう。

往々にして場の雰囲気壊してしまうことが多い。ウイスキーでもワインでも熱弁を振るう人は振るうのだが、諸焼耐には敵わない。一升瓶を手にとると強い。

父の日や父の私憤に記憶なし 清水 悠太

私憤は私事に関する憤り。作者の父は自分個人の憤りは表に出さず、いつも公の立場で冷静に公平な眼で世間に接し家族に接してきたのだろう。「記憶なし」はそういう父への尊敬の言葉。父の日にあらためて父を想う。

父の汗沁み込みし地を開墾す 新海あぐり

作者の父は戦前戦後を一貫して農民運動の先頭に立つて戦った闘士。海拔七五〇メートルの南佐久の地で昭和14年、桑園を開墾し林檎を植え、立派なりんご園を育てた。その父の志を継ぎ、現在はブルーンの生産に命を燃やしながら文筆活動を続けている作者。「開墾す」と高らかに宣言し自身を奮い立たせる。

書いてまた書いて暗記や梅雨ごもり 菅原 淑子

受験勉強ではない。忘れてしまうことが多いので、忘れまいとして、例えば今日の予定や買物リスト、或いは作った俳句を一つ一つ書き出してそれを頭の中に叩き込んでいる。梅雨籠りしている中で大きな努力。



アラジンのランプ入道雲を生み 杉淵真喜子

望みを叶えてくれるという魔法のランプを手に入れたアラジンがそのランプをこすると入道雲が出てきた。奇想天外な発想の句で、小さなランプによく大きな入道雲が納まっていたものと驚かされる。

老いてなほ旅を恋ひたる紅の花 鈴木 智子

紅の花から芭蕉の「まゆはきを俤にして紅粉の花」を思う。尾花沢より立石寺へ赴く途中、紅花畑を道すがら眺めたと謂われている。閉塞的な現世においてなお旅を恋うという作者。紅の花を心にこれからも旅を続けて頂きたい。

誇らしく赴任地語る帰省の子 鈴木 藤子

新任地か転任地か、いずれにしても希望をもつて赴任した帰省子を詠む。暫くぶりの実家で寛ぐ子から誇らしい言葉を聞くことができ、家族も安心したことだろう。

積み直す堰の蛇籠や梅雨出水 高橋美智子

蛇籠は、竹材や鉄線で編んだ長い籠に碎石を詰め込んだもので、古くから河川の護岸などに用いられてきた。私は玉川上水の取水口である羽村堰でその展示物を見掛けたことがある。今年の各地の川の氾濫はひどかった。

雨が好き雨のすき間の濃紫陽花 高橋満利子

紫陽花と雨の句はこれまで多くの方が詠んでいるが、この句は雨を主として「雨のすき間」に紫陽花が咲いていると詠む。ユニークな見方で今後が楽しみである。

推敲や腐草螢となるからは 竹森 美喜

「腐草螢くさそうほなとなる」は暑い頃の季語。古代中国では腐った草が螢に変化すると考えられていた。掲出句の「推敲」はもちろん俳句の推敲。また、「なるからは」は「なるからには」で、決意を表す強い表現。自分の腐ったような句を推敲して螢火が美しく輝くような句にしたいという、謙虚で健気な一句。

老貴婦人ドローンで遊ぶ梅雨晴間 田中 京

この句の面白いところはそのドローンを空へ飛ばしているのが老貴婦人であるということ。どこで習得したのか腕前は確か。梅雨の晴間を暫し独り占めする。

遙かなる眼差しに似てかなかなよ 寺田 幸子

廻をしっかりと見て、聴いて、あとは作者のフィルターで再構築した感性豊かな作品。遠くからの眼差しを哀調帯びたかなかなの声から感じとったのであろう。声とは異質の眼差しを比喻に取り込んだ意外性に注目。